HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | Eからの手紙、それから ― 三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』― |
| 著者 | 林，香苗；HAYASHI，Kanae |
| 引用 | 年報新人文学(22)：74-125 |
| 発行日 | 2025-12-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

# Eからの手紙、それから

## ――三浦綾子『銃口』前史としての『石ころのうた』――

林　香苗

### 序

二〇二五年、戦後八〇年、北海道新聞の特集「わたしたちの平和論」シリーズ「子供と戦争③」（六月一五日）で、「戦う自覚 説いた若き教員」「三浦綾子さん 後悔赤裸々に」という見出しに続き、『石ころのうた』が紹介された。

三浦綾子（旧姓堀田、一九二二―一九九九）の自伝小説『石ころのうた』は、一九七二年四月号から一九七三年八月号まで、角川書店の月刊誌「短歌」に連載され、翌一九七四年四月に単行本として刊行

された。「平凡な一少女のわたしが次第に軍国時代の色に染められつつ、ついに敗戦にあって挫折するまでの自分を、見つめてみたい」と書き出されるように、この作品には、故郷旭川で過ごした幼少時代を描いた『草のうた』に続く四年間の女学校時代と、人生で唯一過ごした旭川以外の地である炭鉱街歌志内での二年四カ月及び旭川での四年八カ月の、延べ七年に渡る希望に燃えた小学校教師時代、そして敗戦後絶望の中退職し、結核療養所入所後、後に綾子を創作と信仰へと導くクリスチャンで幼なじみの前川正と再会する一九四八年一二月より前まで、つまり一三歳から二六歳までの激動の一四年間が綴られている。

文庫解説で同書を「三浦文学の地獄篇」(1)と述べる田宮裕三は、執筆直前、四九歳の綾子が難病血小板減少症（紫斑病）と診断され死を予感したであろうことに着目し、執筆動機を「いまわの贖罪（しょくざい）」とし、水谷昭夫(2)や小田島本有(3)もこの田宮の説を引用する。また、終戦後子どもたちの教科書に「墨塗り」をさせた後自ら教師を辞めた理由を書き残したかったであろうことに執筆動機をみる佐古純一郎は、同書を「三浦文学の原点」(4)とも位置付ける。一方、高野斗志美は、炭鉱労働者の流入が急速に増加し農村地帯とは異なる独特な戦意高揚の雰囲気が充満していた当時の歌志内に着目し、空知郡神威尋常高等小学校教師時代は、綾子にとって「たんなる通過点ではなくて、なにかしら特別の感動的体験をした場所」(5)と捉え、わずか二年四カ月の「〈歌志内体験〉」をとりわけ重要視する。確かにそれは、綾子が川を詠んだ唯一の次の歌にも表れている。

炭塵（たんぢん）に濁れる川の流るる街／神威（かもゐ）の二年は唯に恋しき　（「川の歌」(6)）

川の町旭川に生まれ育った綾子だが、ここで歌われているのは神威に流れる「炭塵に濁れる川」と、そこで暮らした二年四カ月への愛しさである。

これら作家論的視点からの論評に対し、黒古一夫は、「彼女の自伝（小説）が他者に開かれている」のは、「激動する時代や社会のなかで翻弄された自分（の青春）と同じようなことを、次なる世代に二度と繰り返してほしくないという願いがあったからこそ、この自伝（小説）は客観性を獲得し」た[7]と作品論的視点に基づき、同書が強いメッセージ性を伴う「自伝」小説である点を評価する。一方、上出恵子は「自伝小説の可能性」[8]の中で、自伝も虚構で「あくまでも〈小説〉であり、本質的に〈文学〉」とし、フィクションとしての価値を同書に見て取る。

以上のように、『石ころのうた』はこれまで、執筆時期、執筆動機、描かれた内容や三浦文学における位相が三浦綾子論の中で論じられてきたが、二〇一五年に軍事・宗教学者石川明人が、『石ころのうた』単独の論考としては初の「三浦綾子の軍国教師時代とキリスト教」[9]を発表する。全章にわたり『石ころのうた』の内容を詳述するものの、終盤で「戦争問題」の答えを同書に見出そうとする石川は、「結局『権力の非情さ』という表現で国や政府の問題に収斂させてしまうならば、信仰的な人間観に基づく平和論というよりも、世俗的な平和運動としての批判や警戒の掛け声というニュアンスが強くなり、本来のメッセージを矮小化する」ものであるとし、「彼女の平和論の限界だ」とも述べる。

だが本稿では、この「権力の非情さ」は『石ころのうた』の末文で問題提起のみされ作品が閉じられているため、それ自体は描写されておらず、むしろ、作中で「わたし」に鋭く迫る青年「E」を執筆時

の綾子が効果的に造形し、作品終盤で敗戦後の「わたし」に「Eからの手紙」を再読させ「したたかな一撃をくら」わせたからこそ、それから四〇年の時を経て綾子が最後の長編小説『銃口』を執筆し、その中で「権力」が何によりどのように「非情」なものになっていくのかをついに描き切れたのではないか、という仮説を提示する。つまり、『銃口』には『石ころのうた』という前史があり、さらには、『石ころのうた』に登場する青年「E」が作中で「わたし」に真剣に伝え続けた言葉があったからこそ、それが『石ころのうた』執筆以後の作家三浦綾子をも動かし続け、『銃口』に結実したのではないか、と推測するのである。なお、高野[10]や小田島[11]も「Eからの手紙」に言及するものの、そのフィクション性については、管見の限り考察されていない。

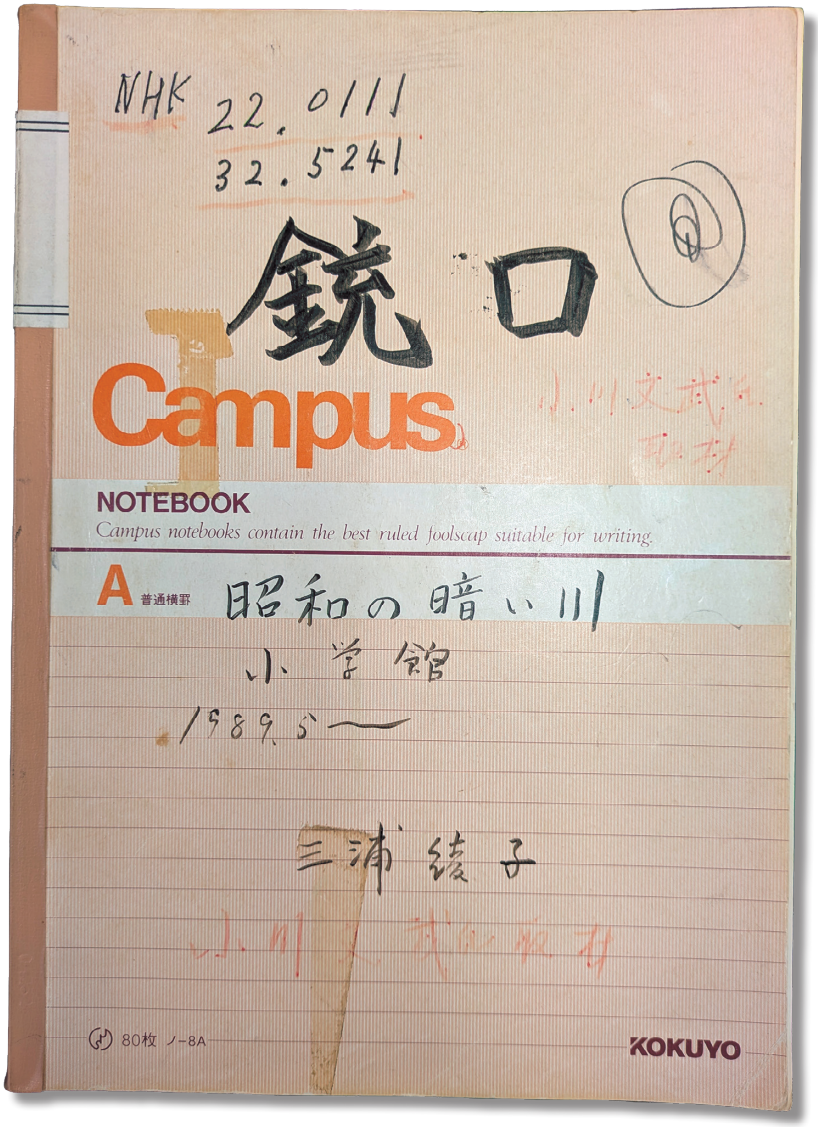
これを論証するにあたり、本稿では上出の論考の延長線上に立ち『石ころのうた』に内在し得るフィクション性を念頭に置きつつ、Eの言動及びEの存在により浮かび上がる朝鮮半島出身の人たちの描写を検証する。そして、その過程で見出した幾つかの虚構性（特に、綾子が「Eの手紙」を再読する場面）について考察する。もちろん、Eのモデルと思しき人物が当時実在していたであろうことは、その「自伝」小説というジャンルを鑑み否定し得ないものの、作中のEの言動には、ノンフィクション（自伝）として読むには不自然な点が散見されるゆえである。むしろ、フィクションだからこそ実際にあったことを整理し誇張、拡大しながら登場人物のキャラクターを際立たせ創作していくことが可能となる。だからこそ描けたEの言動と、そこに込めた作者の意図を検証し、作中でEの言葉に反論する当時（一九四〇年頃）の堀田綾子（作中の「わたし」）と、むしろEの言葉に共鳴する『石ころのうた』執筆時（一九七二年頃）の三浦綾子を対照し、『銃口』の執筆までに与えた影響を以下に考察する。

## 一、『銃口』創作ノート・三浦光世日記・三浦綾子の日記抄からみえるもの

『銃口』は、一九九〇年一月号から一九九三年八月号まで小学館の月刊誌「本の窓」に連載され、翌一九九四年三月に単行本上下巻が刊行された。その創作ノート七冊が、三浦綾子記念文学館に所蔵されている。一～四冊目は主に、資料的内容（教育勅語関係資料・新聞記事・「臨時召集令状」・新聞社からのファックス・書簡等の貼付）、取材メモ的内容（主に夫の三浦光世の筆跡）、作品構想の断片的内容（登場人物名の変遷や年齢・史実・直筆カレンダー・北森家の間取り・聯隊官舎配置図等）の所謂「創作メモ」的内容であるが、作品とノートのページ順に連関性はない。日常の備忘録的メモや、『銃口』の直前に執筆していた現代小説『あのポプラの上が空』の創作メモも見られる。そして五～七冊目は、綾子の弟鉄夫が資料を転記したものである。総じて、原稿用紙一一〇枚に及ぶ長編小説用の創作ノートとしては関連内容が極めて少ない一方で、作品の核心に関わる重要な記載が確認できる。

また、光世一四歳の一九三八年から、九〇歳の二〇一四年までの七六年間を綴った日記（以下、光世日記）計六三冊も同文学館に所蔵されており、その調査・研究が二〇一九年から始まっている[12]。これにより、綾子の創作を口述筆記で支えた光世の視点からも、三浦文学の背景を分析できるようになった。

この光世日記と、綾子の日記風エッセイ（『生かされてある日々』『この病をも賜ものとして　生かされてある日々2』『難病日記』『夕映えの旅人　生かされてある日々3』以下、日記抄）を照合させることにより、日記抄では「〇月〇日」と記載されていた月日を特定することが、一部可能となった。次に引




『銃口』創作ノートの表紙（三浦綾子記念文学館所蔵）

用する日記抄中、月日を明記している箇所は、このようにして特定したものである。

そして、これらの一次資料を調査する中で、この度、『石ころのうた』に『銃口』前史としての連関性を見出すに至った。その関連箇所を時系列にし、次に引用する（エッセイは初出の年月日で記す）。

| | |
|---|---|
| 一九八八年九月一二日（書簡）<br>○月○日（日記抄） | ［編集長眞杉章から綾子へ］昭和を背景に神と人間を書いてほしい［と新小説のテーマを提示される。］(13)<br>山内栄治さんの『民衆の光と影』に、大正天皇大喪の時の歌が出ていたことを思い出してノートす。これを新しい小説の冒頭に使い得たらと思う。（略）何か、暗い昭和を暗示するかのような歌なり。(14) |
| 一九八九年五月（創作ノート）<br>七月一日（エッセイ）<br>八月○日（日記抄）<br>八月三一日（日記抄） | ［表紙］昭和の暗い川／1989.5～<br>［タイトル］黒い川の思い出(15)<br>一応取材ノートには、「黒い河の流れ」と題してはあるのだが。(16)<br>今日は一日、小学館の連載小説の資料調べ。戦時中には実に様々な暗黒な場面があった。灌漑用の貯水池を掘るために、囚人、タコと呼ばれた労働者、そして強制連行によって日本に連れて来られた韓国・朝鮮人などが過酷な労働を強いられた。／なぜ土を掘るだけの作業に従事して、人が次々と死んだのか。(17) |

| | |
|---|---|
| 九月一四日（日記抄） | 朝、床の中で、ふっと今度の連載小説の題名が浮んだ。／「銃口」／という題である。担当者の眞杉氏が、激動の昭和を背景に、神と人間の問題を書いて欲しいと言われた。その昭和の一面を、この「銃口」は象徴してはいまいか。（略）この難波大助事件は、昭和の暗い幕明けの予鈴と言ってもよい。(18) |

ここから、『銃口』のタイトル決定に至る変遷が見て取れる。そもそも、『石ころのうた』と『銃口』の連関性に着眼したきっかけは、「銃口◎」と大きく記されている創作ノート表紙（79頁掲載）に「昭和の暗い川／1989.5～」とも記されていたことであり、これがタイトル「銃口」の原形と思われたことである。着目すべきは、それと似て非なる表現が、『銃口』の執筆に着手する前後の日記抄やエッセイに幾つか見られることである。

まず、一九八八年の日記抄に「暗い昭和」という記載があることから、綾子が新小説の背景「昭和」にはじめは「暗さ」を重ねていたことが窺える。同様に、創作ノートの表紙にも「昭和」「暗い」という言葉を用いたタイトルの原形が確認でき、「暗い」「昭和」を「川」に見立てている構想過程も窺える。

一方、同年七月一日発表のエッセイ「黒い川の思い出」では、「川」を形容する語が「暗い」から「黒い」に変化している。おそらく当初は、「昭和」をイメージとして「暗い」川と表現したが、「唯に恋しき」歌志内の思い出を綴るにあたり、綾子の心象風景として深く記憶に残っていた歌志内の川が「炭塵（たんぢん）に濁り」黒かったため、その色のままに「黒い」川と表したのだろう。

とはいえ、同年八月下旬頃の内容と思しき日記抄には、「一応取材ノートには、『黒い河の流れ』と題してはあるのだが」とあり、実際の創作ノート表紙の記載（「昭和の暗い川」）とは異なり、「昭和」の文字が消え、「暗い川」から「黒い河」へと変化し、表記に揺れが見られる。確かに、「黒い」とすることで新小説（『銃口』）に歌志内時代の思い出を投影できるが、「川」では混迷の昭和を表現するには充分ではなく、そこに大河のようなスケールを付すために「河」と記したのかもしれない。いずれにせよ、このようにタイトルについて様々に想いを巡らせながら、新小説のイメージを固めていったと思われる。

ところが、九月一四日の日記抄には「朝、床の中で、ふっと今度の連載小説の題名が浮んだ」とあり、このようにして「銃口」というまるで異なる題名となるのだが、では、最後に「黒い河の流れ」と記した「八月○日」からこの日までのわずか数日間に、一体何があったのか。

そこで、八月三一日の日記抄の記載に着目する。この日綾子は、光世他数名と（光世日記より[19]）、『銃口』の資料調べとして、旭川近郊の美瑛町に一九三二年に建設が着工された「聖台ダム」を訪れている。そして、「なぜ土を掘るだけの作業に従事して、人が次々と死んだのか」と綾子は疑問を抱き、この「作業に従事」した人の中に「強制連行によって日本に連れて来られた韓国・朝鮮人などが過酷な労働を強いられた」、と知ったことが記されている。そのことがなぜ「銃口」というタイトルに繋がるのかは、拙論「宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』――タイトル「銃口」をめぐる考察――」[20]に拠るが、この日の資料調べが『銃口』に登場する朝鮮人青年金俊明の造形にも影響を与えている、とも考えられよう。以上が、「黒い川」が流れる歌志内での体験を綴った『石ころのうた』に、『銃口』の前史としての位置づけをみる所以なのである。

では、三浦作品の中で「黒い川」や「朝鮮」に関する描写は、いつからどのように展開されてきたのか。

## 二、三浦綾子作品にみる「黒い川」と「朝鮮」描写

本章では、『氷点』で作家デビューした一九六四年からの約三〇年間における三浦作品から、「黒い川」と「朝鮮」に関する描写を調査する。その際、初期、『石ころのうた』、中期、『銃口』執筆期、そして晩年の五期に分け、その変遷を考察する。

以下、初出順（連載作品は、連載開始年で記す）に取り上げ、小説には［小］、伝記小説には［伝］、エッセイには［エ］、講演には［講］、インタビューには［イ］、対談には［対］と付す。

### 二―一、『石ころのうた』以前（一九六四～一九七一年）作家歴一～八年

・一九六五（昭和四〇）年、綾子四三歳。

S字に流れる炭塵でまっくろな川を加代は橋の上に立ちどまって眺めていた。（［小］「井戸」[21]）

・一九六八（昭和四三）年、綾子四六歳。

汁粉のようにどろりとした、炭礦街特有の真っ黒な川が流れ（略）「（略）だけど、小樽の家のほうが、この川よりもっとどす黒いわ。どす黒い川のような家よ」（［小］「どす黒き流れの中より」[22]）

・一九六九（昭和四四）年、綾子四七歳。

①日本人そっくりの少年が、同年輩の白人の少年と、達者な英語で話している。彼は韓国人だという。（略）しかし、この元気な異国の少年たちさえも、代々ここに住みついて来たかのような、やはり自然の中にとけこんだ感じがあった。

（[エ]「チミケップ湖」[23]）

②炭塵に黒く汚れた小さな川が街を縫っていた。（略）「早ク帰レ、オトウサンオカアサン待ッテルヨ」／朝鮮人は、優しく親切だった。（略）（一円で、先生の服を買えるだろうか）／清志は橋の上に立って、暗い川を見つめた。

（[小]「奈落の声」[24]）

「黒い川」の描写が、これら初期の短編小説に確認できる。「まっくろな川」「真っ黒な川」「黒く汚れた小さな川」のように、川を様々に表記するのみならず、「どす黝（くろ）い川のような家」のように、人間の強欲さ（〈原罪〉）の比喩として用い、小説のタイトルにも使用している。これは、「原初の闇の色である（創一：二）」[25]黒に「恐るべき悪のしるし」というイメージを重ね試行した表現かもしれない。また、父から逃れたくて夜家を出た「奈落の声」の少年清志が見つめる先を「暗い川」と表記し、夜の情景と清志の心の内を効果的に重ねようとした様子も見て取れる。

一方「朝鮮」に関する描写は、白人も韓国人も大自然に溶け込む「同じ人間」として描くエッセイ「チミケップ湖」にまず確認できる。だが、既にそれ以前の新聞記事（一九六七年二月一一日「朝鮮時報」朝鮮新報社）[26]にも、綾子は在日中央芸術団の公演を観た感動を綴っている。望郷の念を強く抱いてい

るであろうその「朝鮮人」を自身の小説に登場させ、「早ク帰レ」と「優しく親切」に清志に対して語らせるこの場面には、朝鮮の人々に寄せる綾子の深い想いが表れている。

なお、「奈落の声」に描かれる子どもたちの「ウオーター！」の叫び声は、『石ころのうた』や『銃口』にも描写される。さらに、「奈落の声」の清志が旅芸人の子ゆえ二日間しか主人公真樹子のクラスに通えないという内容は、『石ころのうた』で「この子をモデルにして、わたしは『奈落の声』という短篇を書いた」[27]とも紹介される。「奈落の声」には後の『石ころのうた』、さらには『銃口』に繋がる原形があるもと言えよう。

次節では、『石ころのうた』[28]における「黒い川」と「朝鮮」描写のうち、特に重要な箇所を考察する。

## 二―二、『石ころのうた』（一九七二～一九七三年）作家歴九～一〇年

・一九七二（昭和四七）～一九七三（昭和四八）年、綾子五〇～五一歳。

①川は、汁粉のようにどろりと黒かった。（略）だが、街を蛇行する五メートル幅ほどの川には、ところどころ小さい木の橋がかかっていて、その欄干にもたれて汽車を見ている子供たちの姿などには、なかなか詩情があった。（「五」）

②橋の上だけが、ぽっかりと暗かった。その下を流れる炭塵に汚れた川も、無論暗くて何も見えない。／「先生、名誉って何ですか」（略）改めて名誉とは何かと問われて、わたしはしどろもどろな返事をした。／「国のために死ぬって、そんなに、名誉なことかなあ。ぼくには、嘘のような気がするんです」（「五」）

③　この学年に朝鮮人の子が十五名入学してきた。（略）五、六年生かと思われる大きな男の子が、その一年生の中にいた。四月も末の雪がまた降りそうな寒い日、彼は廊下で会ったわたしに、／「先生、コレやるか」／と黒いセルロイドの筆入れをつき出した。（略）中には、一味唐ガラシ粉がびっしり入っていた。彼はそれを、ふとい指でつまんで口に入れ、／「ああ、うまい。ヤルカ先生」（略）わたしはこの日以来、朝鮮の子供たちに、今までよりずっと親しみを持った。（「六」）

④　六年生の女生徒に宮本という朝鮮の子がいた。（略）その子が、朝鮮語の本を持っていた。受け持ちの教師が、／「この字は何と読むの」／と尋ねた。が、彼女は答えない。（略）「おとうさんが、教えてはいけないといいました」／と彼女はいった。／わたしは、横っ面を殴られたような心地がした。わたしたちが、いくら朝鮮の子をかわいいと思い、生徒たちもまたなついていると思っていても、その間を隔てている目に見えない垣根のあることを、あらためて思い知らされたからだ。当時、わたしたちは、朝鮮人も同じ日本人だといい、そのつもりでいた。だがその生徒の親たちの感情はちがっていたのだ。／朝鮮に住む子供たちは、泣くと、／「日本人が来るよ」／と、親にいわれて育ったという。（略）こんな言葉があったことも、朝鮮人に対する日本政府の弾圧の実態も、わたしたちは戦後はじめて知ったのであって、炭鉱街の教師をしていたその時は知らなかった。（略）わたしがもし聡明であったなら、そうした少女の言葉から朝鮮人への圧政を鋭く嗅ぎとったにちがいない。が、それは今にして思うことであって、当時のわたしは、せいぜい民族の感情のくいちがい程度にしか思ってはいなかった。何という愚かな人間であったことかとつくづく思う。（「六」）

⑤　黒い水の流れる川にかかった橋の上で、朝鮮人と欄干によりかかって何か話し合っているEに会っ

た。わたしは彼に黙礼してそのそばを通り過ぎたが、やがてこの人とも、会うこともなくなるだろうと思った。／その時、なぜかふいにわたしは涙がこぼれた。それは、彼への別離の感情でもあり、愛する街全体に対する、別離の感情のようでもあった。（「七」）

⑥（さようなら、文殊よ）（略）見ると、四年生ぐらいの男の子が、大きな風呂敷を棒につけてふっているではないか。（略）Iは、誰もいない大曲の地で、わたしを見送ってくれていたのだ。／「先生、ほんとうにやめていくの？」（略）戦後、わたしはたびたび、このIを思い出していた。彼の故国は北と南に二分された。どちらの国に彼がいるのか、もしくは戦争で故国に帰る機会も失ったことかと思いながら、その無事をねがっていた。／先年、韓国の週刊誌に随筆を頼まれて、わたしはこのIとの別離を書いた。（「八」）

⑦　汽車は山腹に這い上がるように建つ神威校、まっくろい川にかかった橋、黒く光るずり山を右に見て神威駅に着いた。（「十」）

初期作品と比べ、「黒い川」の描写に変化を確認できる。「汁粉のように」という喩えや「どろりと」などの擬態語は、後のエッセイ（「川の歌」「黒い川の思い出」「歌志内と私」）にも用いられる新たな表現である。また、川にかかる木の橋から、登場人物が何かを見ていたり思案する場としての描写もある。それは先述の「井戸」や「奈落の声」にも共通するが、『石ころのうた』ではそれが一層効果的に用いられている。それゆえ、旭川に転勤した「わたし」が夏休みに神威を訪れる場面（⑦）でも、「わたし」の目に映るのは「まっくろい川」ではなく「まっくろい川にかかった橋」なのであろう。

一方、「朝鮮」に関しては、三人の朝鮮人生徒について詳しく描かれる。一味唐ガラシ粉をくれた男の子のエピソード（③）は晩年のエッセイ「予期せぬ来訪者たち」にも描かれ、朝鮮語を話そうとしない女生徒宮本のエピソード（④）もやはり晩年の対談「三浦綾子さん、『銃口』を語る」で繰り返し語られる。また、風呂敷を振って見送ってくれたIちゃんの帰国を案じるエピソード（⑥）も、中期の小説『青い棘』で「日本人が来るよ」の逸話と共に「朝鮮民族は二つに分割されるに至った」とも描写され、同じく中期のエッセイ「母国を引き裂かれた人々」ではその悲劇を詠じた歌が紹介される。そして『銃口』執筆期のエッセイ「歌志内と私」には、この三つのエピソードが全て描かれるのみならず、「わたしにとって、歌志内線は、実にこの一瞬に凝縮されている」と回想するほど、朝鮮の子どもたちとの思い出が忘れがたく大切な出来事であったことが窺える。と同時に、エッセイや対談で繰り返されることから、③④⑥の内容は、実際にあった出来事を基に綴られたノンフィクションの描写であると言えよう。

さらに、当時の「わたし」の思いと、執筆現在の「わたし」の考えとの差異が明確に表出されている点に、『石ころのうた』の特徴を見る。例えば、青年「E」を慕う「わたし」の生徒「N」が橋の上で、「国のために死ぬって、そんなに、名誉なことかなあ」と迫るが、「わたし」は「しどろもどろな返事をした」り（②）、同じく橋の上で朝鮮人とEが「何か」話し合っているが、「わたし」の関心はそこへは向かず、Eや文殊の街との別離への感傷があるのみである（⑤）。この、朝鮮人とEが何を話していたのかが「見えていないわたし」の描写は、暗い橋の上で「その下を流れる炭塵に汚れた川」が「わたし」には見えていないという描写（②）と同様に、時代に押し流され時代が「見えていなかったわたし」のメタファーでもあろう。なお、「黒い川」と「朝鮮人」が同時に描写される場面（⑤）にEが登場するが、この人物

については第三、四章で詳述する。

**二―三、『石ころのうた』以後～『銃口』執筆前（一九七四～一九八七年）作家歴一一～二四年**

**・一九七七（昭和五二）年、綾子五五歳。**

賀川牧師は（略）特に中国、朝鮮、東南アジアの諸国のために、毎日熱い愛の思いをもって祈ったという。（略）ソ連のため、アメリカのため、中国のため、韓国のため、北朝鮮のため、台湾のため、東南アジアのため、ヨーロッパのため、南米のため、オーストラリアのため、すべての人々のために、愛と謙遜をもって、祈っていきたい。

［エ］「祈りは世界を変える」(29)

**・一九七九（昭和五四）年、綾子五七歳。**

まず朝鮮の釜山に上陸し、北支の塘沽（タンクー）に着いたわけです。

（［伝］『岩に立つ』(30)）

**・一九八〇（昭和五五）年、綾子五八歳。**

①鬼が来ると言っても韓国の子は泣きやまない。しかし日本人が来ると言えば、その恐ろしさにおのいて、幼子はぴたりと泣きやむ。

（［小］『青い棘』壺(31)）

②朝鮮民族は二つに分割されるに至った。（略）北朝鮮と韓国が血を流し合う事態が惹き起こされた。悲劇の朝鮮動乱がこうして始まったのである。（略）「国境って、何だろうなあ、お父さん」（略）「（略）、三十八度線を境に、南北に幅二キロの非武装地帯があるんだよね、お父さん」（略）「そうだ。ここは

北朝鮮でもなければ、韓国でもない。だから、税金もないんだって」（略）「そうだ、天国だ。それが半島全体に及べば大したもんだけどな。とにかくここが、南の人間と北の人間が会うことのできる、ま、救いのような場所だな。

（［小］『青い棘』視点[32]）

③「アメリカ人であろうと、日本人であろうと、朝鮮人（韓国人）であろうと、支那人（中国人）であろうと、人間であることに変わりはない」

（［講］「生きるということ」[33]）

**・一九八一（昭和五六）年、綾子五九歳。**

やがて、この方は、韓国で敗戦の日を迎えました。そしてソ連の捕虜収容所に入れられたのです。

（［エ］「真の平和を願って」[34]）

**・一九八二（昭和五七）年、綾子六〇歳。**

① 宮城県在住の金興坤（きんこうこん）氏もまた、久蔵の底知れぬ愛に触れた一人である。（略）〈（略）当時私たち朝鮮人に対する日本人の多くは（略）吾々朝鮮人を野蛮人か何かのごとく、劣等視していたのであります。（略）故に私たち朝鮮人に与えられる仕事は、常に汚い上に、危険を伴う仕事でありました（略）。／しかるにこの私を、西村久蔵先生は拾い上げてくれたのであります。（［伝］『愛の鬼才』[35]）

② もろともに同じ祖先をもちながら／銃剣取れりここの境に　孫戸妍

（［エ］「牢に満つるとも」[36]）

・一九八三（昭和五八）年、綾子六一歳。

① 大正十二年関東大震災の折、どれほど多くの朝鮮の人々が、あらぬデマのために殺されたことでしょうか。身に何の覚えのない、無抵抗な朝鮮の人々を、あるいはくびり、あるいは突き刺して殺した当時の日本人の姿、そして戦時中の南京虐殺等々。（［エ］「目をさまして！」[37]）

②アイヌの人たちを侵略し、韓国、朝鮮、中国と、その飽くなき侵略はひろげられていったのです。（［エ］「少数者に目を注（と）めよう」[38]）

・一九八四（昭和五九）年、綾子六二歳。

① 今から十五年程前、韓国の木浦（モッポ）市という所で、一人の人が亡くなりました。その人の葬儀には三万人近い人が駈（か）けつけ、その人田内千鶴子（たうちちづこ）さんのために、心から泣き悲しみました。（［エ］「愛は国境を越えて」[39]）

② 登録手帳に記す国籍はいずれにせん／韓国とせんか朝鮮とせんか　川野順　（略）
憎み合い罵（ののし）り合える南北の／朝鮮放送夜々つづく　同前　（略）
外国人登録証を交付さるると／指紋取られ居き並ばされて我は　リカ・キヨシ　（略）
日本人らしく擬装する民族の／哀しみもちて吾は生き来し　韓武夫　（略）

皆同じ人間なのだ。その筈なのに、しかし、皆同じ人間として扱ってはいないのだ。／新潮社から、韓国人女流作家車潤順（チャユンスン）の「天来の声」[40]が出版された。（略）彼女は戦時中日本にあって、嫌いなものが幾つかあった。それは、ニンニクであり、両親の母国語であった。

（[エ]「母国を引き裂かれた人々」(41)）

③　辿り着きし釜山に野宿の群の中／狂ひたるあり自殺せしあり　（[エ]「死を越えるもの」(42)）

④川の水は汁粉のようにどろりとしていた。決して清い流れではなかったが、それでも炭鉱の川には炭鉱の川の風情があった。　（[エ]「川の歌」(43)）

**・一九八五（昭和六〇）年、綾子六三歳。**

旭川のすぐ隣りに東川という町がある。ここに中国人の慰霊碑が建っているが、戦時中日本人は、韓国人や中国人を、人さらいがさらうようにして日本に連行し、奴隷同様に酷使した。人件費を浮かすために、まさに「正しい者を」このような目に遭わせたのである。　（[エ]「賄賂と不正な裁き」(44)）

**・一九八六（昭和六一）年、綾子六四歳。**

①保郎たちは、船で対馬海峡を渡り、釜山からまた汽車に乗った。次いで朝鮮を北上し、鴨緑江を越え、北支那鉄道に乗り継ぎ、　（[伝]『ちいろば先生物語』黄塵(45)）

②朝鮮や満州の各地から、若い幹部候補生が集まった。（略）「うん、この図們からは朝鮮が近い。さっきの朝鮮行きに乗り換えたにちがいない」　（[伝]『ちいろば先生物語』敗退(46)）

③声高に日本人を罵る中国人や朝鮮人の声が病室の中まで聞こえてきた。（略）中国人や朝鮮人が、今までの日本人の暴虐に対して報復を始めたのだ。　（[伝]『ちいろば先生物語』破片(47)）

④「朝鮮人が日本人を皆殺しにする」とか、流言蜚語がしきりに飛んだ。／するとですな、人間とい

うものは妙なもので、たちまちそれを信じてしまう。

（[伝]『夕あり朝あり』大震災[48]）

⑤「何ですって！　キリスト教会に伊勢神宮のお札を飾らせ、拝ませるのですと？」（略）北は樺太から、南は台湾に至るまで、むろん朝鮮も、すべてのキリスト教会に（[伝]『夕あり朝あり』試練[49]）

中期に至り、「黒い川」の描写は一九八四年のエッセイ「川の歌」で「汁粉のようにどろりと」が確認できるのみだが、むしろ「朝鮮」に関する描写は一気に多様性を帯び、主に次の三点に大別できる。

一点目は、「朝鮮」を固有の国としてではなく他国と併記し、「すべての人々」「人間であることに変わりはない」という文脈で用いる描写である。そしてそれを実践したキリスト教社会活動家の賀川豊彦や、韓国の木浦市で始めた共生園で生涯をかけて孤児たちを育てた田内千鶴子を紹介し、講演「生きるということ」やエッセイ「母国を引き裂かれた人々」でも、「皆同じ人間なのだ」と繰り返し述べる。小説『青い棘』で韓国旅行から帰国した「寛」の「国境って、何だろうなあ」という問いや、「お父さん」が三十八度線の非武装地帯に「天国」や「救い」を見る眼差しも、同様の世界観によるものであろう。そして晩年の『銃口』で、竜太の父が金俊明に「たとい朝鮮人でも同じ人間だ」と言う場面の原形が、ここに窺えるのである。

二点目は、一点目とは逆に「朝鮮人」を差別視した史実の描写である。その際、差別された朝鮮人の側からも描く点にその特徴がある。例えば、伝記小説『愛の鬼才』では、西村久蔵に救われた朝鮮人「金興坤」が書簡の中で差別の苦しみと久蔵への感謝を述べ、エッセイ「目をさまして！」や伝記小説『夕あり朝あり』でも、関東大震災で「あらぬデマ」や「流言蜚語（ひご）」のために殺された朝鮮人の側から史実

が描写される。この繰り返し用いられる関東大震災の描写では、日本人の側から捉える場面と、朝鮮人の側から捉える場面とが明確に使い分けられている。これは、次節に挙げる『銃口』において、金俊明に対し「でも、こいつは朝鮮人で……」と言う「関東大震災の時の事件を忘れていない」「良吉」(①)に当時の日本人の視点を投影し、一方で、「彼らは、関東大震災の時に、何の罪もないわれわれの同胞を流言飛語(ママ)をまきちらして六千人も殺した」と、満州で再会した敗走中の竜太に述べる「金俊明」(⑤)に朝鮮人側の想いを投影する、という描写に繋がるものであろう。

三点目は、エッセイ「死を越えるもの」に紹介された短歌や、伝記小説『岩に立つ』『ちいろば先生物語』の主人公が出征する際の中継地点として釜山などが描かれる、地名としての描写であり、次節の『われ弱ければ』(②)の描写も同様である。これは、この時期に相次いで執筆された伝記小説の各主人公を、朝鮮や朝鮮人との関わりからも照らし描き出しているということであり、舞台が満州に移る『銃口』後半の執筆にも反映していると思われる。

**二―四、『銃口』資料調べ・執筆・連載中(一九八八～一九九三年八月)作家歴二五～三〇年**

**・一九八八(昭和六三)年、綾子六六歳。**

①遊郭に売られる女たちにも、貧しさがつきまとった。(略)なんの不自由もなく学校に通って、勉強している生徒たちとは別世界に住んでいるのだ。／(人間はみな等しく神の子だ)

([伝]『われ弱ければ』苦界[50])

②満州・朝鮮への旅は、満州・朝鮮に婦人矯風会の支部を開くためであった。

（[伝]『われ弱ければ』天洋丸[51]）

③戦争中日本人は本当にひどいことをやったわけですけど、そのときにその子は「アメリカ人も日本人も朝鮮人も、みんな同じ人間や」と言った。

（[エ]「命・この尊きもの」[52]）

**・一九八九（昭和六四・平成元）年、綾子六七歳。**

①何とその川は、汁粉のように黒くねっとりと流れていたのだ。／きれいな川の町旭川に生まれ育った私には、この真っ黒い川は異常であった。（略）こんな汚い川のそばで、どうして人間は生きて行けるのかと思った。／それから二年四ヵ月、この黒い川を見て暮らした。町の中の一本道には幾つかの木橋があった。その木橋の欄干に、よく朝鮮の男の人たちが寄りかかって、ひそひそと話し合っていた。今思えば、昭和十五、六年のその頃、朝鮮から連行されて来た人たちであったのかも知れない。欄干に寄りかかり、道に背を向け、じっと黒い川を見つめていた朝鮮の人たちは、一体何を思っていたのだろうか。

（[エ]「黒い川の思い出」[53]）

②そして、私の勤める神威小学校も、その山腹に建っていた。山間を炭塵に汚れた黒いどろりとした川が蛇行し、ところどころに粗末な木橋が架かっていた。／ああそれらは、私の生涯にとって何と懐かしい光景であることか。僅か二年半に満たぬ任期だったが、この町には私の愛する生徒たちがいた。それ故に、この風景は今も私の胸に、かっきりと彫りこまれているのだ。／そんな転校生たちの中に、朝鮮の子が目立つようになった。隣のクラスに、Kという体の大きい一年生がいた。十歳ぐらいでもあったのだろうか。はなはだしい薄着で、冬でも学生服一枚であった。／「Kさん、

寒くない？」と尋ねると、彼は人なつっこい笑顔を見せて、セルロイドの筆入れの蓋をあけ、／「先生、やるか。あったかくなるぞ」と言って、なめて見せた。筆入れには赤いなんばん粉があふれそうに入っていた。／五年生のM子もまた朝鮮の子であった。（略）時折教師たちが、朝鮮の言葉を教えて欲しいと言ったが、その度に彼女は途端にぴたりと口を閉じた。それが朝鮮の人々から母国語を追放し、日本語を強制した日本政府への恐怖からであったことを、愚かにも私は知らなかった。／私の受持ちにも朝鮮の子Sがいた。突然私が辞めることになった時、彼は私に、「本当にやめるの」と幾度も念を押した。私の宿舎にまで来て同じことを聞いた。（略）のろのろと走り、やがて人家も途絶え、汽車が速度を上げた頃、大きな風呂敷を振る少年の姿があった。「Sだ！」そう叫んで身を乗り出し、私は夢中で手を振った。／わたしにとって、歌志内線は、実にこの一瞬に凝縮されている。

（［エ］「歌志内と私」(54)）

**・一九九〇（平成二）年、綾子六八歳。**

①「でも、こいつは朝鮮人で……」／良吉は関東大震災の時の事件を忘れていないのだ。（略）「馬鹿をいうんじゃない。たとい朝鮮人でも同じ人間だ」／凛（りん）と言い放った政太郎の言葉に、男の顔に安堵（あんど）の色がみなぎった。（略）男の体温が竜太の手にあたたかく感じられた。不意に竜太は、どんなことがあってもこの男を無事に逃がしてやりたいと思った。（略）おそらく父母もきょうだいもいるにちがいない。政太郎が言った「同じ人間だ」という言葉が、改めて竜太の胸を打った。

（［小］『銃口』縁（えにし）（一）(55)）

②両親と共に、幼い頃に日本に来たこと、(略) タコ部屋に叩きこまれたこと、棒頭の一人に、朝鮮人ということで悉く目の仇にされたこと、毎日のように棍棒で殴られたり皮靴で蹴られたりして、危険を感ずるようになったこと、遂にタコ部屋を逃げ出したこと等々を、ぽつりぽつりと言葉少なに語ったのだった。(略) 俊明のすることには真実味があった。俊明は、朝誰よりも早く起きて、ひそやかに廊下を拭き清めたり、庭の掃除をしたりした。(略) もしかしたら、美千代は同じ屋根の下に起き臥しする俊明に、心を惹かれはじめたのかもしれない。そこまで考えて、竜太は再び、／(まさか！　民族がちがうんだ) ／と、強く否定した。(略) 美千代は政太郎の影響を受けて、人間は皆同じだ、と時折言う。「愛には国境がない」／ナイチンゲールの好きな美千代は、(略)「懐かしいなあ」(略)「イノック・アーデンか」／と、低い声で読み出した。(略) 流暢に英語を読む俊明に、美千代の目が輝いた。

(〔小〕『銃口』縁(二)[56])

③　一九三七年 (昭和十二) 九月五日、この日竜太は、その赴任地、空知郡幌志内に着いた。(略) 炭塵に黒く濁った小川が流れている。

(〔小〕『銃口』炭塵[57])

④黒い川に渡した橋の上から、下をのぞきこんでいる二人の子が描かれ、

(〔小〕『銃口』初出勤[58])

⑤満州のこの地で、自分の肩を抱いて、「竜太君か」と叫んでくれる人がいようとは、(略)「竜太君！わたしだ。金俊明だ。覚えていますか！」(略)「(略) わたしのたったひとつしかない命を助けてくれた恩人の息子さんだ。(略) 彼らは、関東大震災の時に、何の罪もないわれわれの同胞を流言飛語をまきちらして六千人も殺した。(略) しかし、北森一家は、命懸けでわたしをかばい、肉親にも及ばぬ愛を注いでくれたのだ。わたしが思うに、もし北森一家のような人が、日本にもっといたなら、

朝鮮と日本の国民は兄弟のように愛し合うことができたと思う。日本人のすべてが極悪非道なのではない。(略)「あの聖台土功の貯水池の工事は、無事完成したのですかね」／「いや、たくさんの人が死んだということですから、(略)「(略)鞭で叩かれ、棒で殴られる労働も辛かったが、もっと辛かったのは『チョーセン、チョーセン』と、同じタコにも馬鹿にされることでした。民族がちがうというだけで、なぜこんなに馬鹿にされなければならないのかと。しかし、竜太君のお父さんは、『人間に変りはない。人間は皆同じだ』と、(略)。それがどんなにうれしかったか……」

([小]『銃口』邂逅(59))

⑥日本兵が朝鮮人になりすまして、今ひそかに満州を脱出しようとしているのだ。(略)「(略) 人間の真実は国境を超えて通ずるものがあると思います」

([小]『銃口』羅津まで(60))

⑤ 下関まではおよそ二昼夜を要するが、(略) 何れも朝鮮人で、(略) 頼もしい男たちであった。(略) マリ子は抗日義勇軍のシンパだった。(略) ただ一人の姉は、白昼日本軍に連行された。慰安婦にするためであった。以来マリ子の日本人への憎悪は凄まじいものとなった。

([小]『銃口』祖国の土(一)(61))

⑥○月○日／韓国の牧師であり、かつキリスト教出版の事業をしておられる金昭暎氏と、その夫人で翻訳者の李再信氏、青山四郎牧師ご夫妻と共にご来宅。同じクリスチャンと思えば、国籍の違いなど少しも障りとならず。

([日]『この病をも賜ものとして』第2章(62))

⑦○月○日 (略) 韓国から作家車潤順女子が来ておられたことも喜びの一つ。

([日]『この病をも賜ものとして』第3章(63))

・一九九一（平成三）年、綾子六九歳。

私にとって中国とか韓国とか朝鮮という国は（略）おじさん、おばさん、あるいはお祖父さん、お祖母さんの国みたいに思えるのです。日本にとっての親戚の国であり、他のどこよりも濃い親しみと尊敬を感じています。ですから、ああいうふうになってしまって、何とも言えない、何もしてあげられないという思いでいっぱいです。／でも、人間は抑えられても抑えられても、聖書（ルカ伝一九の四〇）に「このともがら黙さば石叫ぶべし」とあるように、本当に石が叫び出すように、純粋に自分たちの信じることを実現しようとする。権力を持っている人は、このことをよく考えてほしい。権力をもつことの恐ろしさ、軍隊がどちらに銃を向けるのかわからないというのは、とても怖いことです。

（[対]「核状況を超える視点」(64)）

・一九九二（平成四）年、綾子七〇歳。

○月○日／午後小熊秀雄賞受賞パーティー（略）特別受賞者は、有名な在日詩人、韓国人金時鐘氏なり。

（[日]『難病日記』第一章(65)）

この時期の「黒い川」の表現に変化は見られないが、エッセイ「黒い川の思い出」には、それを見た当初の違和感（「この真っ黒い川は異常」「こんな汚い川のそばで、どうして人間は生きて行けるのか」）が初めて明確に綴られる。だからこそ、そこで暮らした後には「懐かしい光景」（エッセイ「歌志内と私」）

へと変化する様子が印象付けられる。

また「黒い川」の木橋で朝鮮人がひそひそと話し合っていた光景は『石ころのうた』(⑤)でも描かれているが、「じっと黒い川を見つめていた朝鮮の」「連行されて来た人たち」は「何を思っていたのだろうか」という問いへの答えは、(『石ころのうた』では鉱夫、対して『銃口』ではタコ部屋労働者、という違いはあるものの)『銃口』のハイライトにおける金俊明のセリフ(②⑤)となり表出される。加えて、「朝鮮人」は竜太と山田の帰還を助ける「頼もしい男たち」としても描かれるが、中期作品から『銃口』に至るまで通底する「同じ人間だ」「真実は国境を超えて通ずる」という綾子の人間観は、『銃口』では竜太の朝鮮人観の変化として丁寧に描かれる。「良吉」同様に、タコ部屋を脱走したこの「朝鮮人」を恐れていた竜太が、金俊明に「同じ人間」を実感する(①)のは、俊明の体温のあたたかさを感じ、「父母もきょうだいもいるにちがいない」一人の人間なのだと気付いた時、として描かれる。

さらに、「マリ子の日本人への憎悪」の要因として、「慰安婦」の記載がここ(⑤)で初めて用いられる。この「軍慰安婦」問題が浮上したのが一九九一年であり[66]、それを一九九三年(「本の窓」六月号)掲載の「祖国の土(一)」の描写に反映させたと思われる。

加えて最も着目すべきは、『銃口』執筆中(一九九一年)の黒古一夫との対談「核状況を超える視点」で、『石ころのうた』の終盤に引用した聖書ルカ伝一九章四〇節(「このともがら黙(もだ)さば石叫ぶべし」)を綾子は再引用し「権力を持っている人」にメッセージを伝え、「軍隊がどちらに銃を向けるのかわからない」恐怖について語る点である。『石ころのうた』の末文で提起した「権力の非情さ」を念頭に置きながら、また当時の情勢を踏まえながら[67]『銃口』を執筆していたことが窺えるのである。

## 二―五、『銃口』連載終了後（一九九三年九月～一九九九年）作家歴三〇～三六年

・一九九三（平成五）年、綾子七一歳。

①〇月〇日（略）旅行者の中には堺からの丁弘鎮（チョンコーチン）・韓吉順（ハンキリスン）ご夫妻を始め（[日]『難病日記』第二章[68]）

②本当にみんな礼儀正しくて頭がよくて、いい子たちだったですよ。ですから私の中で朝鮮の人に対する印象はとてもいいんです。本当に優秀だという感じがします。（[対]「『銃口』を完結して」[69]）

③一人の朝鮮の子が職員室で二～三人の教師に囲まれて、何か聞かれているんです。見ると朝鮮語の習字の手本でした。先生方がその字の読み方を尋ねているんですが、その子はおびえたように返事をしないんです。／私はその時まだ、朝鮮人は母国語を使ってはならないという日本の法律を知りませんでした。（[対]「三浦綾子さん、『銃口』を語る」[70]）

・一九九四（平成六）年、綾子七二歳。

私は『銃口』の中でこんなことを書いていたんです。／ある朝鮮の男の人が戦時中（略）、働いていたタコ部屋から逃げるんですね。（略）ある日本人が二十日間ぐらい彼をかばって、無事に朝鮮へ帰してあげるんです。／その後、助けた日本人の息子が兵隊として満州へ行き、敗戦に近いころその朝鮮の人に偶然出会うわけです。そのとき日本人は手を縛られて、たくさんの朝鮮兵の銃口に囲まれながら、その人の前に据えられる。朝鮮の人は名前を聞いたときに恩人の息子だと分かって、日本人を助けるんです。（[対]「生命・愛が問いかけるもの」[71]）

・一九九五（平成七）年、綾子七三歳。

「うまいぞう先生、これやっか」と、筆入に一杯詰めた唐辛子の粉をつまんで私の口に入れた朝鮮の子、みんなみんな可愛かった。素直だった。優しかった。　（［エ］「予期せぬ来訪者たち」[72]）

・一九九六（平成八）年、綾子七四歳。

炭鉱町の小学校だったから朝鮮人の子どもたちも沢山いた。みんな素直で本当に立派な生活態度だった。しかし、植民地にされていた国の人々の宿命だったのか、次から次へと入ってきては出ていくという状態だった。炭鉱から炭鉱へと流れて行ったのです。（略）朝鮮の人々はわたしが下宿をしていた家のすぐ後ろの崖の上に住んでいた。大変礼儀正しく恐怖など全く感じることはなかった。崖の上からパタパタ降りてくればわたしたちの部屋にすぐ入れるけれど、そんなことは心配無用だった。先生に対する尊敬も日本人より強い、と感じていました。世間では「朝鮮人は怖い」という風潮があったが、わたしにはそんなこと全然感じられなくて、噂さというもののいい加減さを考えさせられた。関東大震災の時に、「朝鮮人が井戸に毒を入れた」などという流言蜚語が飛びかい、そのために多くの朝鮮人が日本人に殺されたことを思うと、本当に風評というもののデタラメさを感じ、怒りさえ憶えます。　（［イ］「生きる」[73]）

最晩年に至り、「黒い川」の描写は見られなくなるが、「〈黒い川の時代〉」の「朝鮮人」生徒との思い出

を再び『銃口』執筆後の対談、エッセイ、インタビューで語っている。また、エッセイ「生きる」に綴られた、綾子の下宿の後ろの崖の上に住んでいた朝鮮人に「恐怖など感じることはなかった」思いは、既に『石ころのうた』の、特に次章第一節で取り上げる場面で効果的に用いられている。

## 三、『石ころのうた』におけるEの人物造形

本章では、前章二―二⑤に引用した「黒い水の流れる川にかかった橋の上で、朝鮮人と」「何か話し合っているE」なる人物にみる造形の特徴を検証する。夕張から歌志内に移ってきた鉱夫Eは、二十代くらいの青年であり、移り住んだ長屋では「危険思想の者」などと噂されていた。

一九四一年、生徒数の増加に伴い、神威尋常高等小学校の分教場が文殊地区に増設され、四月、綾子はそこに転任する。文殊での暮らしは、同年九月に旭川市立啓明国民学校に転任するまでのわずか四ヵ月であり、『石ころのうた』一四章中二章（七、八章）に描かれるのみであるものの、Eの描写全一二ヵ所中の四ヵ所を占め、手紙や回想ではなく対面して対話する貴重な場面として描かれるのが、この文殊での四ヵ月である。

まず、朝鮮人と共にEが現れる次の場面を考察する。

## 三―一、あの人たちに、たんぽぽぐらい

五月のある日、住宅の庭の芝生に人の声が聞こえ障子をあけてみると、朝鮮服を着た婦人たち三、四人が、一面に咲き群れている庭のたんぽぽを摘んでいる。「(無断で、人の家の庭に入って……)」とムッとする「わたし」に婦人は、「塩漬けにすると、おいしいんですよ」と、素直なのんびりとしたやさしい声で返答する。そこにEが現れる。

婦人たちが口々に「こんにちは」とEに声をかける様子から、既に顔見知りだったのだろう。Eは「わたし」に新居の住み心地を尋ね、庭の上の山を指し、あの「飯場は独身者ばかりの集まりだから」「いつ襲いに来るか知れない」と忠告する。これは先述の一九九六年のインタビューでも述べていることから、実際の状況を描写したものであろう。だが、次の場面はどうか。

朝鮮の婦人たちは、彼とわたしに挨拶をして、立ち去って行った。すると彼はまた口をひらいた。

「あの人たちに、たんぽぽぐらい自由に取らせてやってくださいよ。日本は、あの人たちからふるさとを奪い、そのふるさとを、どれほど踏みにじっているか、わからないんですからね」

わたしは、彼と話している間中、絶えず聞きなれぬことを聞かされた。誰も語らぬことばかりだった。それは不安をもたらしもし、また、つまらぬ心配だと笑いたくもなったが、どこか心のひかれる、温かさといおうか、誠実さといおうか、心にひびくものを感じないではいられなかった。(「七」)

ここでEは、この婦人たちと親しい間柄であり、「あの人たちからふるさとを奪い」「自由」を奪ってい

る「日本」が見えている人物として造形されている。それは、逆にそのEの言葉を「聞きなれぬこと」としか聞けていなかった「わたし」を効果的に対称化して浮かび上がらせる、本作に通底する二重構造と言えよう。

また、三浦文学において「ふるさと」は、『続泥流地帯』や『銃口』の重要なモチーフでもあり、朝鮮人の描写は、二章に挙げた朝鮮描写同様に、それを奪われた側に読者の想像を喚起させる役割をも担っているだろう。

とはいえ、人々から「危険人物」と言われ、「わたし」が文殊の新居に移り同僚の三人と住んでいることをいつの間にか知っているほどに情報網を張りめぐらし生活している立場の青年Eを、その人物造形から左翼思想のオルグのような人物(74)と想定するなら、このEのセリフは実際のものであろうか。命懸けで(75)活動の使命を背負い生きる青年が、若干一九歳の一小学校教師「わたし」の自宅に来て、ここまで付きまとうだろうか。虚構性のあるこの場面を、実際の出来事の間に織り交ぜることにより、あたかも現実の描写であるかのように印象付けている。

次節でも、「わたし」の目を開かせようとするEの鋭い言葉を考察する。

## 三―二、ひどいなあ、愚民もいいところだ

ある日の放課後、「わたし」の教室にEが現れる。毎夜南京虫に刺され包帯を巻いていた「わたし」にEは、「ま、南京虫のみならず、せいぜいいろいろなものに食われてみるべきですね、あなたは」「全くの話、ひもじいなんてこと、あなたは知らないでしょう」と迫る。小学校四年の時から教師になるまで牛

乳配達をした、と返す「わたし」に対し、「それにしては生活の意識が低すぎる」と、なおも責める。次いで、「でも、金持ちに生まれたかったとは思わないわ」と自身を「貧しい」ものとして語る「わたし」に、Eは迫る。

「どういうんだろう！　ひどいなあ。愚民もいいところだ」
呆れて彼はわたしを見、
「話にならない」
といった。
「仕方がないわ。わたしとあなたは人生観がちがうのよ」
「冗談じゃない。あなたは、人生観なんて持ってやしない」
「天皇陛下の役に立つ国民を育てるという、使命を持っているわ」
「そんなの人生観じゃない。いわば戦争のための国家の標語ですよ。標語と人生観はちがいますよ」
（「八」）

「役に立つ国民を育てる」ことを「使命」とする「人生観」を疑いもせず全うしていた自身の愚かさを照らし出す役割として、Eが造形されている。実際本作では、このようなEのセリフの前後に、「わたし」が当時の自身を内省する描写が多く見られる。

例えば、このEのセリフの直後にも、次のような自己凝視の描写を綾子は配置する。

与えられた仕事を、国家のために忠実にするというだけなら、あのガス室の大量殺人の仕事を持たされても、黙々と従うだけのことになりかねないのだ。（略）わたしの立つべき立場を、わたしは当時、全く持ってはいなかった。ただひたすら、天皇のために、よい教師であろうという、当時としてはごく一般的な立場に立っていたのだった。（略）

（この人のいうことは、何の戦力にもならない）

わたしは、音もなく流れる大きな時流に巻きこまれている、芥（あくた）のような存在だった。せっかく、わたしの目を開こうとして近づいてきたEを、わたしは危険な人間としか判断できなかったのである。

（「八」）

この、「ただひたすら、天皇のために、よい教師であろうと」したことが、結果的には「あのガス室の大量殺人の仕事」にもなりかねないものであった、とまで自己を断罪する「わたし」の中に、もう一つの想いが見て取れる。それは、このような「愚民」なる「わたし」は、「当時としてはごく一般的な立場にたっていた」だけなのだという意識であり、自身が「音もなく流れる大きな時流に巻きこまれて」いたことへの気付きである。作品の終盤でも、「わたし」は自身を「溝の中に落ちた小さな石」や、「ブルドーザーのような権力」におしつぶされた「石ころ」に喩えているものの、この「音もなく流れる大きな時流」こそ、『銃口』創作ノートの表紙に記されていた「昭和の暗い川」のイメージと重なるのである。

## 三―三、視線と視線がからみ合い

わずか四ヵ月にして、思い出深い文殊分校を去る日がやってきた。この別れのシーンをとりわけ印象づけるのは、先述の朝鮮人「Ｉちゃん」が棒につけた大きな風呂敷を振り、「わたし」を最後まで見送ってくれたことである。戦後、このＩちゃんが帰国した故国が南北に二分されたこと、その思いを綴った韓国誌を読んだＩちゃんが載った号が送られてきたという、後のエッセイにも記された出来事の描写の直後に突如、登場するのがＥである。「わたし」を乗せた汽車が神威駅を出発し、砂川駅に着いた次の場面である。

と、その時、わたしはホームに立つＥの姿に、思わずハッとして足をとめた。Ｅはわたしをじっとみつめたまま、近づいてこようともしない。わたしもまた、Ｅのそばに近づこうとしてなぜか近づけなかった。（略）

とうとうＥは、一言も話しかけはしなかった。発車の瞬間、Ｅの視線とわたしの視線がからみ合った。

（これでいいのだ）

手を振る長田家の人々のうしろに、手をさえ振ろうとせずに立ちつくすＥの姿を見つめながら、わたしはそう思った。

（「八」）

ここで八章が終わり、続く九章は「昭和十六年九月一日、予定通りわたしは旭川市の啓明小学校に勤

めることになった」と始まる。つまり、Eが突如現れるこのシーンは、朝鮮人Iちゃんとの思い出と、実録的に始まる次章との間に配置されることにより、あたかも実際にあった場面であるかのような印象を抱かせる。「Eの視線とわたしの視線がからみ合」うなど、Eの立場や太平洋戦争開戦前夜というこの場面の時代背景を踏まえるなら到底不自然であろうが、そこに気付きにくくさせる仕掛けが施されている。そして、二人が言葉を交わすことなく別れることで、旭川に移りEの元を離れてもなお、「わたし」がEを度々思い出す伏線としているのである。

もちろん、「わたし」の身辺に「危険思想」と人々から噂されるEと思しき青年が実在していたことは想像に難くない。だが、綾子はディテールを変えEの人物像を際立たせ、小説としての起伏を創作していったと思われる。そこで次章では、フィクションとしてのEの役割が最も効果的に作品を動かす、「Eからの手紙」を検証する。

## 四、Eからの手紙、それから

前年の一二月八日、太平洋戦争に突入し、日本の戦局が大きく変わり出した一九四二年の八月末、二学期が始まったある日、夕張の住所から届いたEからの手紙を「わたし」は受け取る。その全文を引用する。

「御無沙汰しました。この間、神威にあなたが現れたことを友人から報せてきました。お元気の御様子で何よりです。

ミッドウェーの海戦にあなたは何を思われましたか。また、ガダルカナルの戦いをどう思っていられますか。恐らく、あなたは何も思わずに生きているのでしょう。

今、こうして、ぼくがペンを走らせている時間にも、人が戦争で死んで行く。しかも無駄な戦争で死んで行く。そう思いつつ焦燥を覚えるぼくらの口惜しさなど、あなたにはわかりますまい。

人間は、わかるべきことを、あまりにもわからなさすぎる。そうした怠惰への怒りを、ぼくはあなたにぶつけたくなる。一体それはなぜだろう。なぜあなたに怒りを覚えるのだろう。

それは、ぼくが非としていることを、あなたは是としているからだ。ぼくが命を賭して否と叫ぶことに、あなたが無関心でいるからだ。

あなたはぼくにとって無縁の人だ。ちがう世界の人だ。疾(と)うにそう知っていながら、今更、ぼくは何を書こうとするのだろう。

お元気で。そのうち、あなたも、つまらぬ男のところに嫁ぐことになるのでしょうね。

E

（「十一」）

堀田綾子さん」

この手紙を文体、内容、そして手紙を出すという行為の三点において検証する。

まず文体に着目した際、男女別に教育が施され、道ですれ違っても言葉も交わさぬほど男女に距離感

のあった当時において、知り合いとはいえ「堀田さん」ならず「あなた」という親密な呼称を、しかもこの短文にして執拗に一〇回も綴るだろうか。

また内容では、日本の戦局が急転直下していた状況下で使命を担っていたであろうEが、「何を思われましたか」「何も思わずに生きているのでしょう」「あなたにはわかりますまい」「あなたが無関心でいるからだ」などと、文殊を去り一年が経過し既に同じ生活空間にさえいない「わたし」の心情に執拗なまでの関心を持ち、これほどまでに介入してくるだろうか。Eは「客観的に見ての、富の不均衡」を問題視し、「社会科学的な視点を持つこと」を「わたし」に迫る人物としても造形されているが、そうであるなら、この手紙の文体は、むしろ「わたし」の感情に過度に迫る点において、物語的すぎると言えないか。

さらに、国家総力戦体制が強化された昭和一七年にあって、大敗に帰した「ミッドウェーの海戦」や「ガダルカナルの戦い」の真偽を問う手紙を送った際、その保持が見つかれば「わたし」は官憲に捕えられるかもしれない。逆に、Eが「非としていることを、」「是としている」「わたし」にこのような反体制の、しかも住所氏名が書かれた手紙を送れば、Eの身に危険が及ぶ可能性もあろう。

以上の三点において、Eからの手紙は、明らかにフィクション性を帯びたものと考えられる。

次に、Eからの手紙を読んだ後の「わたし」の意識の変化をたどり、その創作意図を考察する。

「二度、三度、Eの手紙を読み返した」「わたし」は、「(この人は、わたしを好きなのではないか)」と思う。つまり、手紙の末文を「お元気で。そのうち、あなたも、つまらぬ男のところに嫁ぐことになるのでしょうね。」と結び、「わたし」に「女としての読み方」ができるような文面として描かれている。

そして、「『天皇陛下の赤子（せきし）を育てる』／という、錦の御旗をかかげた教育の在り方に情熱は持っていても、その天皇がいかなる存在か、また、戦局がいかに動いているかを知る、聡明な触覚は持ってはいなかった」と述べる執筆時の「わたし」の自省が、ここでも綴られる。

ところが、手紙を初読してから六年後の冬に、「わたし」はこの手紙を偶然再読する。敗戦直後に発症した結核のため、一九四八年八月に再度、自宅近くの結核療養所に入所したが、冬のある日、探し物があり、実家に帰った際、タンスの中に敷いた新聞紙の破れ目から見えたEからの「昭和十七年八月二十七日付の」あの手紙を見つける。「Eを懐かしく思い出しながら」再読する。その直後である。

読み終えたわたしはしたたかな一撃をくらったような気がした。七年前に読んだ筈の手紙だが、その時はじめて読んだかのように強烈だった。

七年前には見えなかったものが、今はっきりと見えるのだ。

「無駄な戦争で死んで行く」

わたしはこの言葉を再び読み、三度見つめた。　（「十四」）

一度目に手紙を読み終えた時の「わたし」は、確かに「二度、三度、Eからの手紙を読み返し」ている。しかし、再読後の「わたし」の視線は、「無駄な戦争で死んで行く」の一点に焦点化されている。ここには伏線があった。二人が出逢って間もない一九四〇年、「天皇の立派な赤子を育てるために教えています」（「五」）と答えた一七歳の「わたし」にEは、「だから日本はだめになる」と吐き出すように言って

いた。また一九四一年時点でもEは、朝鮮服の婦人たちがたんぽぽを摘みに来たあの庭で、「国は興りも、亡びもするもんなんですよ。いつまでもこの炭鉱が栄えるわけじゃないんですがねえ」(「七」)とも言っていた。「わたし」を慕う生徒「N」が満州の少年義勇軍に入る際、「満州国は砂上の楼閣に過ぎない」(「七」)とも言っていた。そして、その都度反発を覚える「わたし」を対称化し、浮かび上がらせるために、綾子はEの語りを効果的に配置していったと考えられる。

執筆時の「わたし」が、作中の「わたし」に、このEからの手紙を再読させた意図と効果は、もう一つ考えられる。敗戦を迎え「わたし」は、「(とうとうわたしも肺病になった)/内心、『ざまあみろ!』と嘲笑し」自暴自棄に陥っていた。療養所内で大学生や新聞記者や詩人やヒューマニストたちが唾を飛ばしながら語り合っていても、「わたしには一様に不安定に見え」「渇きを覚えて行った」ほどに、虚無的に鬱々とした二年が流れていたのである。

見聞きする一切から心を閉ざしていたこの「わたし」の心に風穴を開け、躍動させる存在としてEの手紙を用い、「わたし」に再読させたのだろう。ここから作品は、加速的に終焉を迎える。「わたしはふいに、自分が路傍の小さな石ころのように思われた。いや、それはわたしだけではない。同時代に生きた多くの人の姿なのだ」。

ただし、「わたし」は自身を、踏まれ蹴られ溝(どぶ)に落ちた「小さな石ころ」と重ね、「石ころのわたしの青春」の愚かさを悔いるのみではなく、聖書ルカ伝一九章四〇節との出会いが「石ころのわたし」を叫ばせ、この書を書かせたことを明るみにする。

「此のともがら黙さば石叫ぶべし」（ルカ伝第十九章四十節）
弟子の口を封じようとした人々に、キリストの答えた言葉である。
故に、わたしはこの書を記した。叫ぶほどではなくても、どんなつまらない石ころもまた、歌うものであることを人々に知ってほしいが故に。そして、すべての石ころをおしつぶすブルドーザーのような権力の非情さを知ってほしいが故に。
（「十四」）

「わたしは何のために自伝を書こうとするのであろう」から書き起こされた本作品で、これが「わたし」が見出した答えである。その執筆契機は、黙されても「石」は「叫ぶ」と語ったキリストの言葉との出会いである。そして、作家三浦綾子として生きる現在の自身に繋がる原点が、Eからの言葉や手紙に映し出されるという手法を用いて、「石ころのわたしの青春」のあった「黒い川」の時代を、本作で蘇らせたと言えよう。

ただし、末文にある「すべての石ころをおしつぶすブルドーザーのような権力の非情さ」に関しては、その存在を場面、場面でほのめかしつつ、特に手紙の再読場面で提起されるものの、「権力」及び「権力の非情さ」の正体自体は本作では展開されずに作品が閉じられる。これは単行本の「あとがき」(76)で、「私が育った時代、その時代の流れは、決して自然発生的なものではなかったと思う」と述べているように、綾子の脳裡には、本作では描かなかった「権力を動かす者たちが、強引に一つの流れをつくり、その流れの中に、国民を巻きこんで行った」時代について、やがて明かしていこうという構想が既に生まれていた、と考えられる。そして今度は、「おしつぶ」された「わたし」以外の「すべての石ころ」の叫びを、

北海道綴方教育連盟事件を軸に据えた『銃口』において蘇らせていくのである。

## 結

本研究は、三浦綾子の自伝小説『石ころのうた』における「Eからの手紙」のフィクション性を論証した、初の試みである。

序では、作品末文に問題提起された「権力の非情さ」は実は本作では描写されておらず、綾子が造形した「Eからの手紙」を戦後「わたし」に再読させるというフィクションを用いて「わたし」に「一撃をくらわせ」、それから最後の長編小説『銃口』が生まれたのではないか、という仮説を提示した。

そこで第一章では、今回『石ころのうた』に『銃口』前史としての位置づけを見出すに至った『銃口』の一次資料調査結果を示した。『銃口』創作ノート表紙の「昭和の暗い川」や、その時期の日記抄の「黒い河の流れ」及び「朝鮮人」に関する記載に、『銃口』の核心に繋がり得るものがあることを発見すると同時に、「暗い川」「黒い川」「黒い河」などタイトルの原形に揺れが見られる点にも着目した。

つづく第二章では、三浦作品から「黒い川」及び「朝鮮」に関する描写を掘り起こし、「黒い川」が流れる歌志内での教師時代も、作家人生を歩み始めてからも、「朝鮮」への想いが生涯貫かれていたことを確認した。それらがいつからどのように展開してきたのかを、長くはなったが詳述せざるを得なかった。

だが、その結果を踏まえ、第三章では『石ころのうた』において朝鮮人に対する「わたし」の目を開

かせてくれたEの言動を取り上げ、そこにフィクションとしての造形を確認した。もし『石ころのうた』にEがいなければ、朝鮮人を描写することが唐突になっていたかもしれない。つまり、『石ころのうた』におけるノンフィクションとしての「朝鮮人」描写は、Eというフィクショナルな存在を媒介することにより、作品化されたのである。

さらに第四章でも、「Eからの手紙」にフィクション性を確認した。それを「わたし」に再読させ、一撃をくらわせる。「石ころ」の「わたし」は「叫ぶ」者でもあることを、聖書のキリストの言葉と出逢わせ知らしめるためである。また、『石ころのうた』で問題提起はされたが描かれなかった「権力の非情さ」は、後に『銃口』で像を結ぶ。

これまで「自伝」小説四部作の一つとして位置付けられてきた『石ころのうた』に、本稿では、Eを造形した作家のストラテジー(77)という新たな側面を見出したが、他の自伝小説及び伝記小説にもこの手法は用いられているのであろうか。その検証を、今後の課題としたい。

（はやし　かなえ・文学研究科日本文化専攻博士課程一年）

凡例

・底本として、『三浦綾子全集』（全二十巻、主婦の友社、一九九一年七月―一九九三年二月）を使用した。ただし、同全集に収められていない作品からの引用は、註に記す通りである。
・三浦綾子『銃口』上下巻の引用は、小学館（一九九四年三月）に拠った。
・『石ころのうた』『銃口』及び、複数回引用した作品のみ、章または章タイトルも明記した。
・単行本化された作品名を記載する際は、雑誌掲載作品または全集掲載作品であっても『　』、単行本のタイトルにされていない作品名の表記は「　」に統一した（第二章、註も同様）。
・引用文における傍線は、筆者が施した。
・引用文において、改行箇所には「／」を付した。ただし略または中略箇所の「／」は省略した。
・略及び中略箇所は、いずれも「（略）」で記した。
・初出の副題及び連載期間等で現物を確認できなかったものは、監修 黒古一夫　著 岡野裕行『三浦綾子書誌』（勉誠出版、二〇〇三年四月）に拠った。
・未発表原稿のエッセイ「歌志内と私」は、所収『国を愛する心』（小学館新書、二〇一六年）に倣い、初出は「黒い川の思い出」の次に位置付けた。
・文芸評論家等の敬称は略した。

［註］

(1) 田宮裕三「解説」『石ころのうた』角川文庫、二〇一二年、三六一頁。

(2) 水谷昭夫『燃える花なれど』新教出版社、一九八六年、二一一―二一二頁。

(3) 小田島本有『三浦綾子論　―その現代的意義―』柏艪舎、二〇二二年、二一―二六頁。

(4) 佐古純一郎『三浦綾子のこころ』朝文社、一九八九年、七―九頁。

(5) 高野斗志美『評伝 三浦綾子―ある魂の軌跡　旭川叢書第27巻』旭川振興公社、二〇〇一年、七八―九三頁。

(6) 三浦綾子「〔短歌に寄せて〕川の歌」(初出「ベルママン」一一月号、学習研究社、一九八四年一一月一日。) 本稿では『三浦綾子全集　第十九巻』所収の『白き冬日』を使用、二八四頁。

(7) 黒古一夫『三浦綾子論　――「愛」と「生きること」の意味――　増補版』柏艪舎、二〇〇九年、一六〇頁。

(8) 上出恵子『三浦綾子研究』双文社出版、二〇〇一年、一六一―一六三頁。

(9) 石川明人「三浦綾子の軍国教師時代とキリスト教」(「桃山学院大学キリスト教論集」第50号、桃山学院大学、二〇一五年三月二三日) 一一三―一二八頁参照。なお、本稿では触れていないが、本来「自伝小説」として書かれた『石ころのうた』を、軍事・宗教史の観点から論じる石川の見解は、綾子の自伝小説のみに、氏の求める戦争問題の答えを見出そうとする点において、筆者（林）とは異なる。その一例として、次に二点挙げる。

① 石川は、「日本基督教団はその成立から敗戦まで，戦時体制に巻き込まれ，教会も牧師も信者も戦争に協力していった」「綾子もこうしたプロセスを知らないはずはなかったと思われるが，彼女はそれについては一切触れていない」(一三二頁)、「綾子はこうした矛盾に十分気付いてはいたが，直接的にはそれについての思索を深められなかった点は，彼女の平和論の限界だと言わざるをえない」(一三三頁) と記す。だが、仏教学者ひろさちやとの晩年の対談で綾子は次のように述べ、信仰を持つ者が戦争を繰り返す矛盾について問題提起する。「三浦　私が不思議に思うのは、この世には神仏を信じている人たちがたくさんいるのに、どうして戦争が認められているのか――ということなんです。人間の世界では歴史上こうなっているとか、経済上こうなっているとか言いわけしては、しょっちゅう戦争を起こしていますね。私は、戦争絶対反対なんです。誰が聞いても『戦争を始めてもいい』とお答えになった神様はいないと思うんです。それなのにキリスト教の国でさえ戦争をする。(略) どうして誰も止

められないのでしょうか。」（『キリスト教・祈りのかたち』主婦の友社、一九九四年、九四―九五頁。）

② 石川は、「そもそも、綾子はその自伝の全体において、戦争という事象を通して見出される人間、ないしは自分自身の本来的な弱さ、愚かさを告白したわけであり、それは信仰的な次元に立ったうえでの反省でもあった。」（一三四頁）と記す。だが、『石ころのうた』に描かれた当時の綾子は受洗以前であり、キリスト教の神ではなく天皇を神と崇めていた。したがって、石川が述べる「信仰的な次元に立ったうえでの反省」はあくまでも執筆時のそれを指すはずである。だが、同書で綾子が追究を試みるのは、情報が厳しく統制され「戦争反対」を唱える者は弾圧された当時において、それでも軍国主義の誤りに気付く手段はあったのか、という自らへの問いであり、さらには、誤りに気付いた者が声を挙げても「非情」なまでに押しつぶした「権力」はいかにして生まれたのか、という「時代」への問いである。石川は、「彼女が『戦争』をあくまでも国家や政府を枠組みとした営みだと捉えていた」（一三三頁）と記すが、『石ころのうた』（一九七四年、三一四頁）のあとがきに綾子は、「私が育った時代、その時代の流れは、決して自然発生的なものではなかったと思う。時の権力者や、その背後にあって権力を動かす者たちが、強引に一つの流れをつくり、その流れの中に、国民を巻きこんで行ったのだと思う」と記す。つまり、石川が述べる「枠組み」としてではなく、綾子は「権力」を「人間」の仕業と考えていることが見て取れる。クリスチャン作家として以後、綾子は人間の罪深さ（〈原罪〉）を作品で提示し、そこからの救いを全ての作品において追求する。また、「権力の非情さ」の実態は『銃口』において像を結んだ、との立場を筆者はとる。

(10) 註（5）同書、一〇八―一〇九頁。

(11) 註（3）同書、二二―二三頁。

(12) 田中綾『あたたかき日光（ひかげ）』三浦綾子・光世物語』（北海道新聞社、二〇二三年）は、光世日記を基に創作された物語であり、同日記の調査・研究により明らかになった一四の新資料が作中に用いられている。

(13) 眞杉章からの三浦綾子宛書簡（一九八八年九月一二日発信、三浦綾子記念文学館所蔵）には、次のように記されている。――『氷点』にはじまる先生の「神」と「人間」という基本的なモチーフを軸として、混沌の二十世紀が、二十一世紀へ贈るメッセージとしていただきたいということです。／舞台背景は、激動と混沌の〝昭和〟という時代です。

(14) 三浦綾子「〔生かされてある日々〕」(「信徒の友」日本基督教団出版局、一九八七年四月―一九八九年九月に連載。本稿では『三浦綾子全集　第二十巻』所収の『生かされてある日々』を使用、八六頁。

(15) 三浦綾子「黒い川の思い出」(初出、「FRONT」7月号、財団法人リバーフロント整備センター、一九八九年七月一日。)本稿では『国を愛する心』(小学館新書、二〇一六年)所収の「黒い川の思い出」を使用、一三一―一三四頁。

(16) 三浦綾子「〔生かされてある日々〕」(「信徒の友」日本基督教団出版局、一九八九年一〇月―一九九二年八月に連載。)本稿では『この病をも賜ものとして　生かされてある日々2』(日本基督教団出版局、一九九四年)を使用、二九頁。

(17) 註(16)同書、二九―三〇頁。

(18) 註(16)同書、三〇―三一頁。

(19) 光世日記「一九八九年八月三一日(木)」の欄に、「吾らはNHKの放送車(キャンピングカー)で、聖台ダム建設に関する情報を集めなければならなかった」「聖台ダムでは、髙藤氏から、建設に関することをたくさん聞」いたとある。実際は、英語表記である。

(20) 林香苗「宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』――タイトル「銃口」における一考察――」(「年報　新人文学」第二十一号、北海学園大学大学院文学研究科、二〇二四年一二月二五日)、一一二―一五八頁参照。

(21) 初出、「井戸」(「オール読物」一〇月号、文藝春秋社、一九六五年一〇月。)本稿では『三浦綾子全集　第二巻』所収の「井戸」を使用、一〇頁。

(22) 初出、「どす黝き流れの中より」(「小説宝石」一一月号、光文社、一九六八年一一月。)本稿では『三浦綾子全集　第三巻』所収の「どす黝き流れの中より」を使用、一九九、二一九頁。

(23) 初出、「チミケップ湖」(「旅情」主婦と生活社、一九六九年三月一五日。)本稿では『一日の苦労は、その日だけで十分です』(小学館、二〇一八年)所収の「チミケップ湖」を使用、五三―五四頁。

(24) 初出、「奈落の声」(「小説宝石」四月号、光文社、一九六九年四月。)本稿では『三浦綾子全集　第四巻』所収の「奈落の声」を使用、八、三一―三二頁。

(25) ミシェル・フイエ著　武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』白水社、二〇〇六年、六一頁。

(26) 同新聞に、「希望と力にみちた舞台　在日朝鮮中央芸術団の公演をみて」と題した三浦綾子の寄稿が掲載されてい

る。その一部を次に引用する。「長い苦難の歴史を知るゆえに、感動は大きかった。／日本人の一人として、日本の侵略を心から恥じ、おわびしたい思いでいっぱいである。／それにしても故国を一度も見たことのない人々に、何がこの歌を、踊りを育て上げさせたのか。」「この運動がどうか世界のすべての人にうったえるものとなるように。そして、朝鮮に自由に往き来することのできる真の平和が一日も早くきますように、心から祈らずにはいられない。」

(27) 初出、「石ころのうた」(「短歌」角川書店、一九七二年四月―一九七三年八月に連載。) 本稿では『三浦綾子全集 第五巻』所収の『石ころのうた』を使用、三三〇頁。

(28) 註 (27) 同書、三二七、三二七、三三四―三三五、三五一、三六六―三六七、三八九頁。

(29) 初出、「〔天の梯子〕祈りは世界を変える」(「主婦の友」一二月号、主婦の友社、一九七七年一二月。) 本稿では『三浦綾子全集 第十七巻』所収の『天の梯子』を使用、二二五―二二六頁。

(30) 初出、『岩に立つ』(講談社、一九七九年五月二四日。) 本稿では『三浦綾子全集 第九巻』所収の『岩に立つ』を使用、五四九頁。

(31) 初出、「青い棘」(「ベルママン」学習研究社、一九八〇年一月―一九八二年二月に連載。) 本稿では『三浦綾子全集 第十一巻』所収の『青い棘』を使用、七二頁。

(32) 註 (31) 同書、九七頁。

(33) 講演「生きるということ」(明石上ノ丸キリスト教会にて、一九八〇年四月一八日。) 本稿では『愛すること生きること』(光文社、一九九七年) 所収の「生きるということ」を使用、七一頁。

(34) 初出、「〔綾子からの手紙〕真の平和を願って」(「マミイ」七月号、小学館、一九八一年七月一日。) 本稿では『三浦綾子全集 第十八巻』所収の「真の平和を願って」を使用、一五一頁。

(35) 初出、「愛の鬼才」(「小説新潮」新潮社、一九八二年六月―一九八三年九月に連載。) 本稿では『三浦綾子全集 第十一巻』所収の『愛の鬼才』を使用、四九二―四九三頁。

(36) 初出、「〔短歌に寄せて〕牢に満つるとも」(「ベルママン」八月号、学習研究社、一九八二年八月一日。) 本稿では註 (6) 同書、一三四頁。

(37) 初出、「目を覚まして！」(「オリーブ通信」オリーブの会、一九八三年三月三日。) 本稿では註 (15) 同書、六一頁。

(38) 初出、「〔綾子からの手紙〕少数者に目を注めよう」(「マミイ」八月号、小学館、一九八三年八月一日。)本稿では註(34)同書、一七八頁。
(39) 初出、「愛は国境を超えて」(「クリスチャン・グラフ」クリスチャン・グラフ社、一九八四年二月《一九八三年八月中央法規出版刊・森山諭著『真珠の詩』から再録》)、本稿は註(15)同書、五八頁。
(40) 車潤順『天来の声―日韓をつなぐ愛の50年』(新潮社、一九八三年四月一日)の発刊に際し、既に一〇年来の信仰の交わりを持っていた三浦綾子は、書評「民族の痛みを映す優れた自伝　車潤順『天来の声―日韓をつなぐ愛の50年』」(「波」新潮社、一九八三年四月一日、三五―三六頁。)を執筆している。その中で綾子は、潤順一家が戦前の日本と戦後の韓国で受けた迫害と、「わたしたちはみんな同胞(きょうだい)でしょう!」という潤順の叫びを記し、「すべての日本人はこの書を読む義務がある」と結ぶ。
(41) 初出、「母国を引き裂かれた人々」(「ベルママン」三月号、学習研究社、一九八四年三月一日。)本稿では註(6)同書、二六八―二七〇頁。
(42) 初出、「死を越えるもの」(「ベルママン」六月号、学習研究社、一九八四年六月一日。)本稿では註(6)同書、二七五頁。
(43) 註(6)同書、二八四頁。
(44) 初出、「賄賂(まいない)と不正な裁き」(「宝石」一〇号、光文社、一九八五年一〇月一日。)本稿では註(6)同書、四五〇頁。
(45) 初出、「ちいろば先生物語」(「週刊朝日」朝日新聞社、一九八六年一月三・一〇日―一九八七年三月二七日に連載。)本稿では『三浦綾子全集　第十三巻』所収の『ちいろば先生物語』を使用、七七頁。
(46) 註(45)同書、九三、九五―九六頁。
(47) 註(45)同書、一〇三頁。
(48) 初出、「夕あり朝あり」(「北海道新聞」北海道新聞社、一九八六年九月二三日―一九八七年五月三日に連載。)本稿では註(45)同書、五四三―五四四頁。
(49) 註(45)同書、五六九頁。
(50) 初出、「われ弱ければ―矢島梶子伝」(「幼児と保育」小学館、一九八八年四月―一九八九年七月に連載。)本稿では『三浦綾子全集　第十四巻』所収の『われ弱ければ―矢島梶子伝』を使用、二四八頁。

(51) 註 (50) 同書、二七〇頁。
(52) 講演（第30回全国自治体病院学会特別講演、旭川市にて、一九九一年九月二一日。）本稿では『キリスト教・祈りのかたち』（主婦の友社、一九九四年）所収の「第1部　2命・この尊きもの」を使用、三七頁。
(53) 註 (15) 同書、一三一―一三二頁。
(54) 註 (15) 同書、一三五―一三七頁。
(55)『銃口』上、一三〇頁。
(56) 註 (55) 同書、一三九、一四〇、一四五、一四八頁。
(57) 註 (55) 同書、一六六頁。
(58) 註 (55) 同書、一八九頁。
(59)『銃口』下、二三三、二三七―二三八、二四三―二四四頁。
(60) 註 (59) 同書、二五〇、二六〇頁。
(61) 註 (59) 同書、二六五、二六七頁。
(62) 註 (16) 同書、一〇九―一一〇頁。
(63) 註 (16) 同書、一五三頁。
(64) 初出『異議あり！　現代文学』（河合出版、一九九一年三月。）本稿では『三浦綾子対話集1　人と自然』（旬報社、一九九九年）を使用、一二一頁。
(65) 初出「（生かされてある日々）」（「信徒の友」日本基督教団出版局、一九九二年八月―一九九五年三月まで連載。）本稿では『難病日記』（角川文庫、二〇〇〇年）を使用、四〇頁。
(66) 吉見義明『日本軍慰安婦』（岩波新書、二〇一五年）、二頁に、「『軍慰安婦』問題が人びとに強いインパクトを与え、解決すべき問題として浮上したのは、被害者として韓国人の金学潤（キムハクスン）さんが名乗り出た一九九一年から」とある。
(67) 竹林一志「三浦綾子文学と戦争―戦争の描かれ方の変遷を中心として」（「キリスト教文学」第四十一号、日本キリスト教文学会、二〇二四年五月一一日）、一〇七頁に、「『銃口』連載中の一九九〇年、イラクがクウェートに侵攻した後、日本政府が自衛隊海外派遣のためにPKO協力法を成立させようとしていたときも、三浦は『戦争への道

を許すわけにはいかない』として『自衛隊の海外派兵は反対』との声明を出す（三浦綾子〔一九九〇、一八頁〕）」とある。

(68) 註（65）同書、一四八頁。

(69) 初出、「対談　特別連載小説『銃口』を完結して」三浦綾子、黒古一夫、司会眞杉章（「本の窓」9・10月号、小学館、一九九三年一〇月一日。）本稿では『三浦綾子対談集　希望、明日へ』（北海道新聞社、一九九五年）を使用、一三三頁。

(70) 初出、「私と生徒たちとの個性的な出会い　三浦綾子さん、『銃口』を語る」（「エデュカス」第5号、大月書店、一九九四年七月。）本稿では、註（69）同書、一六三頁。

(71) 註（52）同書、「第2部　生命・愛が問いかけるもの　三浦綾子・ひろさちや対談」一五一―一五二頁。

(72) 初出、「〈命ある限り〉予期せぬ来訪者たち」（「野生時代」5月号、一九九五年、五月一日。）本稿では『命ある限り』（角川文庫、一九九九年）を使用、一〇九頁。

(73) 三浦綾子『さまざまな愛のかたち』（ほるぷ出版、一九九七年）、九三―九四頁。同書の「まえがき」に、一九九六年十一月、三浦綾子宅にて黒古一夫によるインタビューが収録されたことが記されている。

(74) 上杉朋史著　荻野富士夫解説『西田信春　――蘇る死――』（学習の友社、二〇二〇年）第四章「九州地方オルグとして」、二二〇―二四六頁参照。

(75) 明石博隆・松浦総三編『昭和特高弾圧史　1――知識人にたいする弾圧 上』（太平出版社、一九七五年）第二部「『支那事変』下の弾圧の強化――一九三七年七月～四一年一二月」、一二一―三二一頁参照。

(76) 三浦綾子『石ころのうた』角川書店、一九七九年、三一四頁。

(77) 田中綾「三浦綾子『道ありき〈青春編〉』の引用歌―小説（フィクション）における短歌引用という戦略（ストラテジー）」（編集　公益財団法人北海道文学館「図録・作品集　北方文芸　2017」北海道文学館、二〇一七年、一七三―一七九頁）の中で、自伝小説『道ありき〈青春編〉』における「作家のストラテジー」については、その小説的効果と共に既に詳述されている。